

# 水俣における公害教育－水俣葦北公害研究サークルの活動に着目して－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Doi, Taeko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00051026">https://doi.org/10.24517/00051026</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 水俣における公害教育

## —水俣葦北公害研究サークルの活動に着目して—

土井 妙子

### Environmental Pollution Education in Minamata : Focus on Activities of Minamata Ashikita Environmental Pollution Study Circle

Taeko DOI

#### はじめに

本稿は、水俣病の最激基地、水俣市において長年公害教育に取り組んできた「水俣葦北公害研究サークル」の歴史と教育実践に着目し、その内実を明らかにする。

教師たちの自主的な組織である同サークルは、1976年に設立されて以降、水俣病を教育実践課題として積極的に取り上げ、教材集などを発行し、現地の公害教育実践をリードしてきた。教師たちは患者の生活実態から学び、教育実践として教室に還元した経緯がある。筆者は、学生時代より幾度か水俣を訪問し、主にこのサークルのメンバーに協力いただき、聞き取り調査をしたり、授業実践資料を収集し、検討したりしてきた。こういった研究経緯から、いったんサークルの歩みを取りまとめて述べたいと考える。

世界史的な公害・環境問題の視点からみれば、公害先進国だった日本の四大公害は、それぞれが最も激甚な公害問題のひとつであった。とりわけ本稿で取り上げる水俣病は、1972年、ストックホルムで開催された国連人間環境会議において、胎児性水俣病患者の坂本しのぶらが自らその身体をさらすことで問題の深刻さを訴え、世界に衝撃を与えた。

この水俣病をはじめとする公害問題を教育のテーマとして扱った公害教育は、自然保護教育とならんで現在の日本の環境教育の源流のひとつ

つといわれている。不幸にも公害先進国であった日本において、公害問題に対応した教育実践や理論について解明することは重要な研究課題である。しかし、日本教職員組合（日教組）の教育研究全国集会（教研集会）における実践者たち自らの報告などは多数あり、彼らとともに公害教育の実践研究を行ってきた藤岡貞彦<sup>1</sup>や福島達夫<sup>2</sup>、福島要一<sup>3</sup>といった研究者たちの報告もあるが、散発的であった。このため、たとえば四日市の公害教育とは通史的にどのようなものだったのかを知りたければ、後の世代の筆者は自ら現地に何度も通い、資料を掘り起こしてまとめなければならなかった。

2000年代以降、ようやく筆者ら次世代によって個別事例研究が少しずつ積みあげられ、それぞれの地域の公害教育の全体像が把握できる基盤が形成されてきた。曾貧による三島・沼津の西岡実践<sup>4</sup>、筆者による四日市や<sup>5</sup>、林による

<sup>1</sup> 長年、日教組教研集会の助言者だった藤岡貞彦らによる「公害と教育」分科会報告（日本教職員組合『日本の教育』、1971年より1988年まで藤岡らはほぼ毎年報告をしている。分科会名は何度か変更している）がある。

<sup>2</sup> 福島達夫『環境教育の成立と発展』（国土社、1993年）など。

<sup>3</sup> 福島要一『環境教育の理論と実践』（あゆみ出版、1985年）など。

<sup>4</sup> 曾貧『日本における「公害・環境教育」の成立—教

西淀川の事例研究が挙げられる<sup>6</sup>。本稿でとりあげる水俣に関する事例は、筆者と同時期に水俣において聞き取り調査をしてきた安藤聡彦がゼミ生ともども包括的な研究を進めており、この論考とも知見が重なる部分がある<sup>7</sup>。このほか、田中裕一に限定した水俣病の実践の検討として、和井田清司による論考がある<sup>8</sup>。

これらの研究の多くは、「偏向教育」との批判にさらされながら、公害被害者側にたった教育実践をあえて行うことの意味と実践、その形成過程に関して述べられており、本稿もまた困難な実践が生み出された経緯と実践そのものに着目するものである。

それぞれの地域の公害教育に関する知見が積みあがってきたとはいえ、他の重要公害問題事例の包括的な検討は未着手であり、公害教育全体の理論形成にはまだ遠く、地球規模の環境問題まで射程にいれた現代的環境教育の中でどのように捉えるかなど課題は大きいといえるが、本稿は、重要地点における公害教育からまず検討することで、公害・環境教育の基礎理論形成に貢献しようとするものである。

この困難な教育実践を検討するには、各種の資料調査と同時に教師の聞き取り調査も重要と考える。しかしながら、「語られる真実」を裏付けるための資料や人的ネットワークがすでに手を尽くして探しても見当たらない場合

育実践/運動/理論の分析を通して』、一橋大学博士論文、2007年。

<sup>5</sup> 土井妙子「高度経済成長期の四日市における公害教育の展開」、『子どもと自然学会誌』3巻2号、2006年、pp.1-15。

<sup>6</sup> 林美帆「西淀川の公害教育」、除本理史・林美帆編『西淀川公害の40年』ミネルヴァ書房、2013年、pp.65-104。

<sup>7</sup> 安藤聡彦他「水俣病を〈伝える〉」；水俣市および出水市における公害教育運動の生成、「公害教育運動の基礎的研究 環境教育史研究の構築」（科研費成果報告書、代表 安藤聡彦）、2012年、pp.19-135。

<sup>8</sup> 和井田清司『戦後日本の教育実践—リーディングス・田中裕一』学文社、2010年。

がある。一方で、最も被害の大きな地域での公害教育実践の証言としての重要性は、被害者救済や今後の公害発生防止のためにも認められるべきものであろう。特に第2章は、ライフヒストリー法を用いて教師たちが直面した困難や公害実践が生み出された背景など、貴重な教育実践を推進しながらも文書資料として足跡をあまり残していない教師たちの多様な「生」をたどる。

### 1. 初発の水俣病授業

本稿で着目する水俣病の授業実践として、初発の知られた実践は、1968年11月、熊本市内中学校教師の田中裕一（1930-2003）のものである。田中は、論争を呼び起こすことが予想された水俣病の授業をあえて行った。厚生省が政府統一見解として、水俣病の原因がチッソ工場からの廃液であると公式に断定が出された段階での、つまり加害者が公的に特定され、授業内容の正統性を強力に担保できる時期を見計らった実践であった。人間的な怒りと教育労働者として15年間患者を放置した激しい自責の念から行われた、歴史的な水俣病授業である<sup>9</sup>。

実際の授業において田中は、チッソの附属病院長だった細川医師によって行われた工場廃液を猫に与えて水俣病を発症させる猫400号の実験を取り上げた。さらに、この実験により病院側で原因がわかっていたにもかかわらず、行政主導のあっせん委員会では、窮迫している患者を見越して、患者が今後、水俣病が工場廃液に起因したことが判明しても補償金の要求を行わないことと条件をつけて見舞金の契約をした問題を取り上げ、授業を行った。さらに田中は教室に桑原史成の写真や新聞資料などを貼り、夫と一人娘を水俣病で亡くした上野栄子や、13年間意識不明のままの「生きた人形」といわれた美少女、松永久美子を取りあげ、水俣病患者へ

<sup>9</sup> 田中裕一「水俣病授業研究から学ぶもの」、「国民教育」No.1、労働旬報社、1969年、pp.172-178。

の共感を呼び起こすことを目標とした<sup>10</sup>。

この授業に対して幅広い議論が巻き起こった。参観した熊本大学教育学部の三浦教授は、資本主義の公害という暗い面を強調しすぎると批判した。市教育委員会の指導主事も、公害を取り上げること自体には問題はないが、なまなましい資料を直接ぶつけ、特定の一事象から社会全体への不信感を芽生えさせるものではないか、と意見を述べた。地元紙・熊本日日新聞では、「水俣病授業が体制への不信感喚起を主要目標とするものであったら、それは偏向である」と授業を参観していない論説委員が書き、批判した<sup>11</sup>。

こういった批判に対して、生徒たちは水俣病を学習する意義をむしろ十分に理解していた。たとえば、患者の写真を初めて見たある生徒は、中学生が見るには暗すぎるという人が、そんな悲惨なむごいことをどうして15年も見過ごしていたのか。そんなことをいう人たちが早く考えていなければならなかったことだと感想を述べた。また、別の生徒は、現実の真の姿を理解するには生々しい資料のほうがよほど効果的で、自分はあれらの写真を見て精神的ショックを受けるよりも、水俣病を闇に葬ろうとした会社や通産省やそういった大人たちによほどショックを受けるといった感想をもった<sup>12</sup>。

1971年に開催された公害教育をテーマとした全国レベルのはじめての集会である、日教組教研集会「公害と教育」分科会では、水俣病の患者も参加しており、「先生、遅い。先生方おそすぎます。これだけ公害があつて…。公害のおそろしさを知ってほしいのです。ぼくのような片わになってよいのですか。あなたが、あなたの子どもが、そして教え子が。私たちは賠償が

ほしくて訴訟しているわけではありません。公害の恐ろしさを考えてほしいからなのです。また責任がどこにあるかははっきりさせたいのです。先生方には市民の先頭になって立ち上がる姿勢が少ないとおもいます。今日この会場にくるとき、先生方は隣の先生や父兄や住民やわれわれのような患者をさそってきましたか。先生方、ぜひ運動を幅ひろくすすめてください」と発言し、水俣の教師に対して、なぜとりくみが遅れたのか、水俣でさえも全教師が立ち上がっているわけではないのはなぜか、とのきびしい質問を寄せた。積極的な活動を行っているのは、水俣市において結局数名の教師のみであったとされる<sup>13</sup>。

歴史的な田中の実践は、しかしながら熊本市内での実践であり、その後も田中は公害教育に携わったものの、終生水俣市内で勤務することはなかった。本稿では、これまであまり注目されてこなかった最も激甚な被害地である水俣市内での公害教育の歴史に光をあてる。水俣市を中心とする水俣病の教育実践史を包括的に綴るための作業過程である。

## 2. 水俣を誇りうる教育を —水俣葦北公害研究サークルの活動—

水俣葦北公害研究サークル(以下、「公害サークル」)は、鶴山寅亀(1926-1987)や広瀬武が中心となって1976年8月に発足し、現在も継続して活動している<sup>14</sup>。公害サークル結成の直接的な契機は、その前年、水俣高校定時制内の弁論大会において、患者を差別する内容の発表が

<sup>13</sup> 日本教職員組合『日本の教育』1971年、p.525。

<sup>14</sup> 公害サークルの設立経緯に関しては、西弘「公害と教育 水俣葦北報告—反省と新しい実践を—」、「日教組第26次教育研究全国集会報告書」(日教組教育図書館蔵)、1977年および本稿で取り上げた公害サークルメンバーの広瀬、田中、梅田、濱口への聞き取り調査から。聞き取り調査の日時は、各メンバーの項を参照。なお、これらのメンバーには本論文の草稿の段階で全体の内容を確認していただいている。

<sup>10</sup> 熊本県国民教育研究所・熊本県教職員組合編「水俣病とその授業研究」、1969年、pp.25-49。

<sup>11</sup> 熊本県国民教育研究所・熊本県教職員組合編、同上書および田中裕一「公害水俣病問題の今日的意義」、「教育」No.236、国土社、1969年、pp.22-31。

<sup>12</sup> 田中裕一、前掲註9、pp.173-174。

1位となり、代表として熊本県の弁論大会に出た事件にある。「本当に水俣病なのかと思う人があまりにも多すぎる」、「水俣病になりさえすれば、いくら働いても簡単に手に入らないくらいのお金をもらえるのだから、いっそのこと水俣病になって楽に暮したほうがいいのではないかと誰だって思うと思います」、病名に地名がついていることで地域全体が差別されることになるため、「せめて水俣病という名でなかったら」という。

こういった生徒の発言の責任の一端は、水俣病を不十分な形で教えた私たちにある、物や金さえあれば豊かと思ってしまう現在の生活を見直すきっかけになればと教師たちは話し合い、サークルが結成された。少々時期をさかのぼると、1970年度の日教組教研集会において先述の「公害と教育」分科会が設立され、問題関心が共有されたことも契機だったという。

サークルの活動としては、公害教育の実践研究はもとより、それと連動して水俣病患者への支援を行ったり、県内外の見学者への案内などを実施したりしてきた。たとえば見学案内として2014年の夏休みには、県内外の20組の案内を実施し、熊本学園大学との共催で主に教師向けに「水俣病を伝えるセミナー」の実施もした。実践研究の顕著な成果としては、教材集を発行して実践向上に貢献してきたことが挙げられる。1979年、最初に発行した教材集「水俣病・授業実践のために—学習材・資料集—」（表紙が青いため「青本」と呼ばれる）は、水俣病に関する基本的知識として、歴史や病症、被害者の聞き取りといった、教師や一般成人にもわかりやすく解説された部分と、小中学校教師向けの指導案が掲載されている。

サークルの中心メンバーのひとり、田中睦は、資料集として作成したのは、資料がまとまっていなくて現地で実践がしにくいことと、県内外からの訪問者を案内する際にちょうどよいからとのことだ。患者の聞き取りをもとに書かれた部分などは、信頼関係がないと話してもらえな

い、そういう意味で地元のサークルとしてこの資料集を誇りに思っているという。79年以降、3回改訂されており、サークルメンバーが宿舎をするなどして現在進行形の水俣病問題を理解しながら内容を更新している。

結成当初のメンバーは22名といわれている。2010年以降は20数名ほどである。月に一度の例会はコンスタントに継続し、2017年には470回を数えた。このサークルの主要メンバーへの聞き取り調査から、水俣現地における水俣病の授業実践の足跡をたどりたい。

## 2-1. 広瀬武（ひろせ たけし）先生 1934年生 /公害サークル2代目会長（1987-2000）

水俣市出身で小学校教師だった広瀬は、地元水俣市において最も早い段階で水俣病の授業をした人物といわれる<sup>15</sup>。1971年、葛渡小学校での実践だった。そもそも広瀬が水俣病と関わり出したのは、1968年に水俣にはじめてできた反公害運動団体「水俣病対策市民会議」（以下、「市民会議」）に参加し始めてからだという。参加するまで広瀬は水俣病に全く関心がなく、他の教師たちも同様で、職員室で水俣病の話題が出るなどなかったという。しかし、広瀬の義母はかの日吉フミ子であり、広瀬と日吉は水俣第一小学校時代の元同僚であった。義母が市民会議を立ち上げた以上、参加せざるを得ない状況となったのだ。

<sup>15</sup> このほか、市内で最も早い段階の実践として、1960年代半ばの第二中学校での橋口彰三の実践があるといわれる（埼玉大学教育学部安藤研究室『水俣に学ぶ2006』2007年、pp.31-32）。橋口は、利害関係が錯綜した地域での実践の困難さから存分にできなかったという。なお、筆者は2011年より熊本県教職員組合などの教育関係機関において資料収集を行ってきたが、60年代～70年代の実践記録がほとんど残っていないことが判明している。広瀬への聞き取り調査は、2011年11月23日（於：熊本学園大学）、2014年9月4日（於：水俣市内）。以下の文献も参考にした。広瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会「部落解放研究くまもと」27、1994年、pp.1-17。

小学校の教頭だった義母が、組合から推薦されて最初に水俣市会議員となったのは1963年である。隣に住む議員の家族として、来客・泊り客の接待や電話の取次ぎの仕事、加えて子育てなど広瀬夫妻は多忙だったという。その市民会議には広瀬や鶴山ほか教職員組合の教師が何名か積極的にかかわっており、住民運動を推し進めることはもちろんだが、今後は水俣病の教育実践に取り組みたいと当初より話しあっていたという。その時点において、まだ地元で教育実践がないことに反省する声もあった。水俣病裁判には教師たちと交代で傍聴によく出かけ、街頭でカンパの要請をしたこともあったという。

教師たちは、市民会議の活動としての裁判資料作成のため、分担して患者たちの聞き取り調査をする中で、患者たちとの関係が強くなっていった。そういった結びつきの中で患者の濱元二徳からは「先生たちがやらないで誰がやと？教えるのが仕事でしょ」と学校で水俣病について教えることを強く要望された。濱元の両親は劇症水俣病患者として狂うように亡くなったという。他人に見せたいとは思わないであろう両親の映像を教師たちに見せて公害教育の実践に気持ちを向かわせたという。

1971年、その実践者のトップバッターとして白羽の矢があたったのが広瀬だった。理由として、広瀬の職場は管理職が組合活動に理解をもっていたことや、小規模校であり、クラスの担任は皆組合員ということもあり、やりやすいと周囲が判断したためだった。授業前には職員会議で報告し、了解を得て、校長も何かあったら自分が責任をとると言ってくれたという。授業には患者の濱元も参加してくれた。濱元は、水俣病のため震える手でチョークをもって板書をし、子どもに語り掛けもした。

しかし、この葛渡小学校5年生の授業「工業の発展のかげで」は、校長会で問題となり、「裁判中になまなましい」、「教育は中立、公正でなければならぬ」などと非難されたという。一

方で勤務先の校長らは擁護してくれた。例によって市議会ではチッソ出身の議員も問題とした。

翌年、1972年に袋小学校に転出し、前校と同様に公害教育を始めたという。最も被害の大きな校区である袋小学校であったが、公害教育は手をつけられておらず、ゼロからスタートさせた。これに関して同僚たちからは何か非難めいたことなどと言われることはなかったものの、地域の方からは警戒されたという。広瀬は公害教育の実践を開始する前に家庭環境調査をし、家族に水俣病患者がいるかを聞いたところ、あるふた組の保護者から「水俣病のことを調べて子どものためになるのか」と厳しいクレームがきたという。どちらも家族に重病の水俣病患者がいた保護者であり、「寝た子をおこさないでほしい」と願っていた。

広瀬は公害教育の目的として、①偏見を排し、差別を許さない、②水俣病を正しく認識し、公害を許さない、③人間の尊厳や人命の尊重を考えさせる、④自然を愛護し、環境の保全に努力する、という点を挙げている。患者家族ということで世間の冷たい視線におびえ、偏見のために差別を受けることが許されてよいはずがない、最も被害の激甚な地域できちんと公害教育をしなくてはならないとの信念から、こういった保護者には手紙を書いたり話をしたりして理解してもらったという。この保護者たちは後には広瀬の応援をするようになった。一連の公害教育の実践は、患者やチッソ第1組合が応援してくれ、私たちがついているからやってくれといわれたという。

広瀬は袋小学校の同僚で公害教育の同志であった鶴山とともにたびたび上村家を訪ねた。ユージン・スミスが撮影した入浴写真で有名な胎児性水俣病の上村智子(1955-1977)の弟妹のうち、広瀬はふたりを担当として受け持った経験がある。袋小学校での弟妹の様子を保護者に伝えるために通ったのである。教師たちは、患者に会い、裁判と教育実践とを往復させながら

過ごしてきたのだ。

この上村家では、「宝子（たからご）」と言って智子を大切に育てたのだ。7人兄弟の智子のほかの弟妹が皆元気に育ったのは、第1子だった智子がすべての毒を負ったからとお母さんは考えている。このお母さんは、たびたび訪問した広瀬に「智子は宝子です」と何度も話したという。「宝子」の智子の存在は、上村家の家族愛のもとになっていたとも広瀬は考えている。広瀬がたびたび上村家に通ったのは、上村家の水俣病を学ぶことでもあった。同い年の智子のお父さんの帰りを待って、時に一緒に焼酎を飲み、裁判の話もしたという。

裁判の頃から交流のあった原田正純の言葉のなかで印象深いものに、「差別が公害を生む」という言葉があるという。水俣で生まれ育ち、水俣で教師人生を送ってきた広瀬には、現地住民として、つまり当事者としての特別の言葉の重みがある。水俣にもともとあった差別構造は、自分の生き方と被害者の立場がつながっていく。明治の終わりに水俣にチッソがやってきて、貧富の差から差別構造が生まれ、その中で水俣病が発生したのだ。広瀬の兄もチッソの社員だった。原田が言ったとおり、反対に公害が差別を生むということも実感するところだという。

教師によっては、患者を差別する者もあり、また、患者をもつ家庭の子どもたちの事情に思いをはせることができなかつた者もいる。広瀬でさえ、ある児童の父親が患者であり、そのために家庭が困窮していたことを知らず、学校へ持ってくる集金が滞っていてもその児童に催促するだけだったという経験がある。のちに家庭の事情を知り、忸怩たる思いをもったというのだ。子どもたちの思いや痛みから学び、分かち合うことの大切さを子ども自身から学んだという。

さて、最初の裁判は、1973年3月に被害者側には勝訴判決が出された。患者たちの申請にはずみがつき、学校での公害教育は取り組みやすくなり、他の教師たちもあとに続いたという。お

りしも県の教職員組合では通称「赤本」と呼ばれた赤い表紙の冊子「公害と教育」を1972年秋に作成し、県下一斉の水俣病授業を提案した。この赤本作成には熊本市内の社会科教師が主となって関わり、水俣からは広瀬らも参加した。裁判後は県内各地から現地見学に訪れる教師が非常に多くなり、広瀬たちは案内で忙しくなったという。

その後、1976年に「水俣羣北公害研究サークル」が結成されたのは、先述したとおりである。鶴山、広瀬や猶木勇、西弘、生伊佐男らが中心となったという。初代会長だった鶴山は、広瀬の水俣第一小学校での教育実習の際の担当の先生だった。同校は、広瀬の卒業した小学校でもある。教育実習終了後に、校長からうちの小学校で働くかと聞かれ、卒業後はそのまま同小学校で勤務することになり、鶴山とは先輩後輩の間柄となった。鶴山と広瀬は、お互いを「鶴さん」、「武さん」と呼び合うようになり、兄弟のような関係性でもあったという。鶴山の弟は戦争中に病死したためか、8歳年下で年齢が近い広瀬を弟のように思っていたのではないかと広瀬は話す。定年退職後、鶴山は1年もせずには他界し、早すぎる死を残念に思っているという。現役教師時代には、鶴山とは葛渡小学校や袋小学校、石坂川小学校でも一緒に勤務しており、その袋小学校時代に新任の教師としてやってきたのが、3代目会長となる田中睦だった。広瀬と鶴山は、田中を公害教育実践の仲間とするべく、田中の面倒をなにくれと見て、3人で水俣病の勉強会もしてきたという。

## 2-2. 田中睦（たなか あつし）先生 1951年生 /3代目会長（2000-2012）

熊本市出身の田中睦は、公害サークル発足当初からのメンバーである<sup>16</sup>。共に教師だった両

<sup>16</sup> 田中への聞き取り調査は、2010年2月19日、2011年9月13日、2014年9月2日、いずれも水俣市内にて。このほか、田中睦「水俣病と教育」（原田正純

親は、息子が新任の赴任先として水俣に行くとき広瀬たちが作成した「赤本」を持たせたという。県内で組織的に作成された水俣病に関する初めての教師用手引書といってよい。

1974年、「赤本」を持たされた田中の初めての勤務先は最も被害が激甚な「爆心地」袋小学校だった。公害サークルをはじめ、現地の方は袋小学校や百聞排水口など、被害激甚地や原因物質の流出地点を「爆心地」と呼ぶことで、人的被害やコミュニティへの甚大な被害を形容する。

この田中が水俣病に関わるきっかけとなったのは、市民会議のメンバーであり、袋小学校に勤務していた広瀬と鶴山に連れられ、上村智子の家を訪問したことにある。ショックを受けた。正直なところ、怖かったという。

智子は、生まれたときから手足がうまく動かせない。目は見えないが、目を閉じることができず、ずっと開きっぱなしで目薬が欠かせない。耳もよく聞かえない。食べ物の飲み込みが難しく、流動食をのどのところでスプーンで押し込むという。このため1食につき2時間を要する。周囲の方の助けなしには生きていけないのだ。

智子は7人兄弟の第1子であり、下の弟妹はみな健康だ。智子の両親は、すべての犠牲を背負った智子を「宝子」（たからご）として大切に愛情をこめて育てた。田中の公害教育の原点は、この智子との出会いにあった。

田中の職場である袋小学校内には、水俣病の授業に対して一定程度の支持があり、何の圧力もなかったという。田中は赴任した翌年、75年に水俣病の授業実践をはじめ、直後に水俣病の授業を公開する機会がまわってきたという。患者の濱元二徳も授業を見に来て、「早くもっとういう授業をしていればなあ」と感想を話してくれたという。今から振り返ると企業の責任追及に終始した授業だった。当時は何の問題にも

ならなかったが、その2~3年前までは、偏向教育攻撃を受けたらどうかのことだ。

この濱元は、1955年頃から症状が出始めたという。濱元とその両親は漁をしていたが、両親はともに水俣病で亡くなった。濱元は、胎児性水俣病患者の坂本しのぶらと共に1972年のストックホルム会議に出席し、その身体をさらして世界に水俣病問題を訴えた。長年水俣病資料館で「語り部」として見学者に話もしてきた。

田中は、「教育は夢と希望を語らなければならない」という理念が公害教育にも当てはまるのではないかと今になって思うという。坂本しのぶや上村智子を大切に育てたお母さんたちの優しさを何とか希望や夢として公害教育実践に結実できたらと考えている。

### 2-3. 梅田卓治（うめだ たくじ）先生 1958年生/4代目会長（2012-）

梅田は、自身の生まれ・育ちから公害教育の実践者としての歩みまで、本稿で取り上げた他の教師より自身で多く書き記している。本稿では、順を追って水俣での教育実践について記したいため、そういった梅田による資料の繰り返しの部分も多いが、一部筆者の聞き取りも加えて梅田を紹介したいと考える<sup>17</sup>。

その梅田は、チッソ社員の子どもとして水俣で生まれた。梅田の小学校時代は、周囲の大人たちの関心は水俣病問題よりもチッソの組合対立のほうにあり、学校でも水俣病の学習がなかったように思うのとのことだ。

中学校時代には、水俣市民でありながら、水俣病患者を差別していたと大人になって振り返る。それは市の陸上大会のことだ。400メートル走で最後の直線を苦しうに顔をゆがめながら、思うように動かない手足を必死にバタつか

編『水俣学講義 第3集』日本評論社、2007年、pp.127-145）や自身の教育実践資料などを参照した。

<sup>17</sup> 梅田への聞き取り調査は、2010年2月20日、2011年9月13日、いずれも水俣市内で。このほか、下記の文献を参照した。梅田卓治「水俣病患者・子どもたちに教えられながら」、熊本県部落解放研究会「部落解放研究くまもと」第32号、1996年、pp.23-65。



せ走っている袋中学校の生徒に対し、「見ろ水俣病が走ると」と同級生がからかい、皆で笑ったという。梅田もその笑ったひとりだった。その行為に対して学校の教師から何発もビンタを受けたという。先生は泣いていた。

その後、熊本市内の高校に進学したが、特に水俣病について周囲から言われぬことにほっとして過ごしたという。水俣のいやな部分は見なくなかったのだ。

この梅田の子ども時代、父のなかまたちは「患者がいるから水俣は暗い、患者が騒ぐからボーナスが減る、患者はピンピンしているのにお金欲しさだろう」などと言っていたため、梅田には偏った情報しか入ってこなかったという。患者として真剣にチツと対峙した川本輝夫にしても、社長の前で机の上ののってこぶしを握りしめている映像しかテレビに映らない。椅子に座って冷静に話し合っていた時間があつたとしても、その部分は映像として流れてこない、そんなことも知らなかった、想像もつかなかつたという。教師になつたあと、教職員組合青年部の10数名で構成詩「水俣」を作る際、川本に会って、穏やかな印象を受け、勝手に自分が作り上げていたイメージと違っており、情報が偏っていたことに気づいたのだ。

横浜の大学に進学した梅田は、周囲に出身地をはっきりと言えなかつたという。「九州」「熊本」までは言えるが、「水俣」とはなかなか言えない。付き合いが深くなると「水俣」と打ち明けることになるのだが、ほとんどの友人は「お前は大丈夫だったのか、水俣病にかからなかつたのか」と聞いてきた。梅田は、「水俣病は一部の漁村で発生していて、町なかに住んでいた自分たちは関係ない」と間違つた答えを言い、友人たちを納得させていたという。

そんなとき、ある友人に「なぜお前は水俣出身だとストレートに言わず、九州とか熊本とといった言い方で逃げてきたのか。お前の心の中には水俣病患者に対して迷惑だと考える意識があたりはしないか！ 同じ水俣に住んでいた人間と

して恥ずかしくないのか」と問いただしてきた。梅田は返す言葉もなく、故郷の水俣をいい加減に考えてきたと思ひ知らされた出来事となつた。やがて教師になる身として、これまでの自分のような生き方ではなく、水俣を正面から捉え、水俣を語れる子どもを育てたいと思うようになったという。

故郷に帰つた梅田の最初の赴任地は熊本県菊池郡のある小学校だった。そこでは同和教育に真剣に取り組んでいる大勢の同僚から学ぶことができ、教師としての土台ができたという。

次の赴任校は、「爆心地」袋小学校だった。中学生時代に市の陸上大会でからかつた子どもが在籍していた、あの袋中学校と同じ敷地内にある。梅田は赴任後すぐに水俣病の実践を開始する。まず初年度は5年生の担任となり、市内音楽会で発表するための構成詩「海」をつくつた。84年のことである。これが子どもと共に水俣と水俣病を見つめる作業になつた。発表自体も周囲に大きな反響を呼んだ<sup>18</sup>。

翌年、持ちあがりて担任をした子どもは、修学旅行先で差別事件に遭遇した。雲仙で「どこから来たのか」と尋ねてきた大人に対して「水俣だ」と子どもが答えると、その大人は走って逃げたという。梅田は、子どもの詩を通してその事件を知つた。子どもは、大人に対して情けなく思ったと同時に、その場でうまく大人に対応できなかった自分自身に対してふがいなさを感じたようだ。しかし、子どもたちは理不尽な差別事件の経験を消化し、水俣病への認識は授業者の梅田の予想をはるかに超えたものとなつた。

<sup>18</sup> 2014年、筆者は水俣市内の胎児性水俣病患者の作業所「ほっとはうす」で、この構成詩の主題曲といつてよい「海」という曲を偶然聞いたことがある。他県から水俣を学習するために訪れていた高校生たちが患者とともにこの曲を歌っていたのだ。地域の歴史が凝縮した、30年前に作られた音楽が、市内の別の場所に埋め込まれているのだ。患者を思う地元の方たちの歴史や地域内ネットワークの強さを表すものと捉えられよう。

ていく。正面から水俣病と地元を理解しようとしていたのだ。

袋小学校の子どもに限らず、水俣の子どもたちはたびたび差別事件に遭遇する。水俣の子どもたちには、出身地ゆえに差別されるのではないか、という恐れが常につきまとう。梅田は差別に打ち勝つ公害教育実践を意図し、その実践を通して子どもたちは、深く地元を理解し、自分自身の生き方を見つめていった。

さて、袋小学校勤務時代、梅田は教育方法面での工夫もした。これまでは、患者に来てもらって話を聞いていたが、子どもたちを患者の生活の場や資料館に連れていくことで、より実感のこもった学習が展開できるようになったというのだ。たとえば、患者の農園の牛を見て、話を聞いたり、歴史考証館の見学をしたりしたという。子どもたちは授業の中で患者に出会うと真剣に話を聞くという。この経験から教師は出会いをきちんとつくるのが大事だと思っている。

また、あるとき水俣病の兄弟を持った保護者から「私はある先生に出会うまで、学校の先生は大嫌いだった。弟・妹の世話のために遅刻すると、廊下に立たされた。怠けたり好きで遅刻したわけではないのに、誰も事情をくみとってくれなかった。周りから笑われ、何度も死のうと思ったが、兄弟の面倒を誰がみるのかと考えると死ねなかった」との話聞いた。梅田はショックを受け、自身の水俣病への向き合い方を改めて振り返ったという。患者ひとりひとりの事情や思いを理解することの大切さもこういった患者や関係者から学んできた。

梅田は交流の深い胎児性水俣病患者の坂本しのぶを「すごい人だ」と思っているという。あるとき、梅田の勤務先の子どものが、坂本の歩く真似をしたという。坂本は体が不自由なため特徴的な歩き方をする。これを坂本に相談すると、「私が友だちになればいい。学校に行って話す」と言う。そのあと、実際に坂本は学校に来て自分自身の話をしたという。

坂本は、胎児性水俣病患者として生まれたこ

との社会的な使命を理解しているのだと思う。申し訳ないけれども筆者には坂本の話す言葉は不明瞭で聞き取りにくく理解できないが、坂本と交流のある梅田や後述する濱口は坂本の言葉をきちんと理解している。坂本の生き方や思いを理解し、交流しながら公害教育を実践しているのだ。

梅田はこういった患者からのメッセージを真剣に受けとっている。それは、「先生たちにお願したいことは、真実をありのままに教えて欲しい。公害を教えるのではなく、公害を出さない教育をして欲しい」、「水俣から逃げる教育ではなく、水俣を誇りうる教育をしてほしい」というものだ。

梅田自身は、成人後に水俣に戻り、患者と出会うことで解放された、ほっとしたという。公害サークルの仲間たちの存在も大きく、安心でき、受け止めてくれているという。サークルのメンバーだから、〇〇さんの後輩だからということで、患者たちも梅田を受け入れてくれたという。これまでの公害サークルのメンバーたちが積み重ねた活動への信頼があったのだ。

20～30年前までは、公害教育はやりにくかったという。ある意味、クビをかけて実践し、そうすることで患者からの信用を得られたという。患者からは「先生たちはいやになったら逃げればいい。いいよね。でも自分たちはそうはいかない」という。梅田は患者たちの思いを受け止め、水俣病の実践を使命として継続したいと思っている。

### 2-3. 濱口尚子（はまぐち なおこ）先生 1957年生

濱口は熊本市で生まれ、2歳の時に葦北町へ移り幼少期を過ごした<sup>19</sup>。実家は商売をしており、その関係で漁師たちをはじめいろいろな人が家に出入りをしていたり、遊びに行ったりし

<sup>19</sup> 濱口への聞き取り調査は、2010年2月19日、2011年9月13日、2014年9月3日、水俣市内にて。

ていたため、子ども時代に水俣病の噂は聞いていたという。

教師となった最初の赴任先は熊本市内の小学校だった。5年生の担任をしたときなどは、教科書を見て水俣病を教えたという。その頃はまだ問題意識が希薄だった。

濱口が公害教育に積極的に取り組みはじめたきっかけは、1984年、27歳のとき、先述した田中睦と出会い公害サークルに加入したことだ。上村智子の命日に、公害サークルのメンバーにご自宅に連れていったもらったこともきっかけのひとつだったという。智子のお父さんはニコニコしながら、「当時は人の3倍働いたよ」と語った。胎児性水俣病患者の智子を大切に育て、苦勞をしたと思うが、あたたかく優しい智子のご両親を尊敬しているという。

梅田の水俣病実践「構成詩」にも衝撃を受けたという。教育実践としての公害教育の広がりを感じたのだった。梅田と濱口は同年齢であり、同じ年から水俣市内に勤務していたが、梅田は水俣病実践者としては少し先輩にあたるのだ。濱口はこのときちょうどチッソ近くの水俣第二小学校で勤務していた。こういった経験が積み重なり、同小に赴任した2、3年後から本格的に水俣病の実践活動を開始したという。

この水俣第二小学校には8年間勤務し、「青本」をもとに1年生から6年生まで授業をしたという。水俣第二小学校は、保護者にチッソ関係者が多かったことなどから管理職や先輩教員、保護者から反発が多くあり、水俣病の実践に困難な面があったという。しかし、同校でも起きた修学旅行先での差別事件がきっかけとなり、水俣病学習の重要性が認識されるようになった。年間計画や指導内容を練り、その後も水俣病の授業を継続して実施してきたという<sup>20</sup>。

<sup>20</sup> 水俣第二小学校および袋小学校勤務時代の実践報告として、下記の資料も参考にした。津江成子・濱口尚子「水俣市を誇れる子どもたちに—構成詩「海・生命」の取り組み—」、「日教組第48次教育研究全国集会報告書」（日教組教育図書館蔵）、1999年。

津奈木町内の小学校に5年間勤務した際は、地理的に離れていたこともあり、水俣病は他人事と思っている人が多く、水俣病の実践をしても学校内に浸透しなかったという。

次の勤務校は、最も激甚な被害地にある袋小学校である。自ら希望し、念願かなって1997年から7年間勤務した。袋小学校には、水俣第二小学校時代からの公害サークルの仲間が何名かおり、公害教育を充実させることの可能な人間関係に恵まれ、やっと自分の思う実践ができたという。

まず、3、4年生は「海」「いのち」をテーマとして、構成詩をつくる実践を行った。梅田の実践を見て、いつか自分も水俣をテーマにした構成詩を作る実践をしたいと思っていたのだ。作曲は保護者に依頼し、出来上がった曲の素晴らしさに何度も繰り返し聞いたという。授業には患者も呼んだ。濱口には子どもたちが水俣を誇れるようにとの思いがあった。同和担当として中心的に実施した人権集会では、水俣病の患者が子どもと一緒に初めて保護者の前に立った。子どもの学習発表会を通して親を啓発しようとしたのだ。

この袋小学校勤務時代には、坂本しのぶから「知らないことが差別を呼んだ。今度姪が袋小に入学するから、早くみんなに知ってもらいたい。私が袋小で話す機会を作ってもらいたい」と要望された。実際の授業は、坂本ら被害を受けた人を中心に組み立て、坂本のほか、複数の胎児性水俣病患者や濱元二徳、杉本栄子ら患者に来ていただいたという。

さて、この袋小学校時代、人権集会においてどの学年も水俣病を取り上げた年があった。保護者からは「チッソに勤める父を連れてこなければよかった」、「なぜ水俣病ばかりなのか？」など攻撃的な感想が出たという。それまでは素晴らしい実践だとほめてもらっていた。保護者の中には、劇、踊りの「2001水俣ハイヤ節」などに子どもだけではなく、自分たちもその場に参加させてほしい、という要望もあった。

こういった意見や要望を受け、教師たちはなぜ啓発しているのかを確認し、却って相互理解が深まったという。この件で保護者ともやりとりが交わされ、つながりが出て水俣病が語れる関係になった。1994年から市長によって「もやい直し」が提唱され、この時期には市内で水俣病をオープンに語れる雰囲気醸成されていたことも影響したのかもしれない。

この「2001 水俣ハイヤ節」とは、網元の娘として育った患者の杉本栄子(1939-2008)が2000年に作った踊りである。杉本はリハビリを兼ねて踊りを習っていたのだ。20世紀は戦争や水俣病といった悲しい出来事があったが、21世紀は子どもたちが明るく暮らせるよう、また、人々のつながりを大切にすると願いが込められており、患者も車椅子の人も踊れるよう作ったという。

「2001 水俣ハイヤ節」を踊る前にはこの踊りに込められた意味を説明するという。関係者はこれを「魂入れ(たましいいれ)」と呼ぶ。杉本は「ただ踊ってもらいたくない。意味を知ってもらいたい」のだという。2000年12月の運動会では、杉本に踊りに込められた意味を語ってもらい、皆で踊った。運動会の全校ダンス担当だった濱口が提案したことがきっかけとなり、市民も患者も一緒にはじめて踊ったのだという。

袋小学校の同僚の先生たちは、組合員だろうと非組合員だろうと公害教育に積極的だったという。目の前に水俣病患者の家族を持つ子どもたちが大勢おり、正面から向き合わなくてはならない環境なのだ。

その後濱口は、市内の山間の小学校に勤務している。この学校でも公害教育は継続して実践しているという。子どもたちに杉本を合わせたり、杉本の船に乗ったり、「2001 水俣ハイヤ節」を踊ったりしたこともあるという。濱口が勤務する前年には土石流災害があり、子どもの中には親が死んでしまったり、泥まみれの中から生還したりした子どももいる。「濱口先生ががんばれ、つきすすめ」と応援してくれていた杉本は他界

してしまっただが、別の土地で自然災害にあった子どもたちを今後も「2001 水俣ハイヤ節」で元気づけたいと願っている。

### おわりに

本稿では、水俣病実践に関して、最初期の代表的な教育実践や公害サークルを代表するメンバーの取り組みに着目し、その特徴を述べた。先輩教員に連れられて出会った患者がきっかけとなって公害教育の実践を始めるなど、それぞれのメンバーが水俣病と関わる印象深い契機をもち、勤務先の学校では多彩な教育実践を展開していた。これらの教育実践は、患者との交流や支援者としての活動、水俣病の基礎的な勉強を通しての教材作成など、水俣病と地道に向き合うなかで生まれてきたのだ。筆者が公害サークルの集まりに何度か参加した際には、メンバーが公害教育実践や普段の仕事全般に関する事など、あたたかい雰囲気のなかで率直にやりとりしていた。仲間同士のつながりが基盤となってこそこの公害教育実践であろう。一方、現在の公害サークルの課題は、若手メンバーのリクルートにそれほど成功しているとは言い難い点だとも聞く。このため毎年夏休みに地元の教師向けの水俣病の勉強会を開催するなどして公害教育実践の引継ぎの努力を重ねている。

本稿で取り上げた公害サークルの中心メンバー以外にも真摯に水俣病と向き合ってきたメンバーは他にもおり、筆者の次の研究課題としては、こういったメンバーも包含した形で分析を整理しながら、地元の反公害運動全体や地方政治に関する分析も組み込み、より多面的にアプローチしたいと考える。本稿はその序章として位置づけたい。

## 水俣葦北公害研究サークルの歴史

1967年	日教組第16次教育研究全国集会「人権と民族教育」部会 廣田孝（水俣市葛渡小学校）「人権意識を育てるために－水俣病をめぐる－」報告。
1968年	広瀬武が「水俣病対策市民会議」に参加。日教組第17次教育研究全国集会「人権と民族」部会 広瀬武（水俣市葛渡小学校）「生活破壊とのたたかい」報告。 国は、「水俣病の原因はチッソ工場の排水に含まれる有機水銀が原因」。11月に熊本市の中学校教師、田中裕一が水俣病をテーマとした授業実践を行う。
1969年	訴訟派29世帯112名が提訴。6月に水俣市教職員組合の運動として、問題別研究部会に水俣病問題を取り上げ、15名の部員で発足。この部会の部員は、「水俣病対策市民会議」に加入し、活動。患者の実態を知ろうと患者宅などで事情を聴く。日教組第19次教育研究全国集会「人権と民族」部会 廣田孝（水俣市湯出小学校）「公害へのとり組み－再び水俣病をめぐる－」報告。
1970年	前年度発足した教職員組合内の部会は、部員が32名となった。
1971年	広瀬武、水俣病をテーマとした教育実践を初めて行う。葛渡小学校5年生社会科「工業の発展のかげで」。
1972年	広瀬武、袋小学校へ転勤。3年生で水俣病をテーマとした教育実践「大きな工場ができて」。熊本県教職員組合「公害と教育」発刊。表紙が赤いため「赤本」と呼ばれた。
1973年	水俣病裁判、患者側勝訴判決。第3回「公害と教育」研究全国集会が水俣で開催。教育実践分科会にて広瀬は袋小の取り組みを報告。
1975年	田中睦、袋小学校にて初めて水俣病をテーマとした授業。
1976年	水俣葦北公害研究サークル結成。会長は鶴山寅亀、会員22名。総合学習について討議開始。
1979年	サークルとして独自の教材・資料集「水俣病・授業実践のために」発刊。表紙が青いため「青本」と呼ばれた。
1981年	「水俣病・授業実践のために」（青本）を一部改訂。
1987年	鶴山会長死去。広瀬が2代目会長に。
1989年	サークルとして独自の学習材・教材集「水俣病・授業実践のために 水俣の過去・現在そして未来を考える」発刊。高校の授業実践から作成。表紙が黄色いため「黄本」と呼ばれた。
1995年	「水俣病・授業実践のために」（青本）の2度目の改訂。
2000年	3代目会長は田中睦に。
2007年	「水俣病・授業実践のために」（青本）の3度目の改訂。
2012年	4代目会長は梅田卓治に。

（田中睦「水俣の現状とサークルの歩み」（「日教組第54次教育研究全国集会報告書」（日教組教育図書館蔵）、2005年）および広瀬、田中、梅田、濱口への聞き取り調査から作成）

## 付記

聞き取り調査にご協力くださった水俣の皆さまに心より厚く御礼申し上げます。なお、本稿は、日本カリキュラム学会第24回大会（2013年）において口頭発表した原稿をリライトしたものであり、本研究の一部は、科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号23530993、研究課題名「水

俣における公害教育カリキュラムの研究」2011～2013年度、代表 土井妙子）を受けた研究成果である。